

びわこ学院大学 令和八年度 学校推薦型選抜（公募推薦）「教養問題」

（注）設問で指示した字数には句読点等も含みます。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

赤ちゃんは、生まれたときから他者と関わるために必要な社会的認知能力を持っています。代表的なものとして、他者の顔、表情、視線、動きなどを認識する能力が挙げられます。特に顔は、コミュニケーションにおいて重要な役割を果たし、多くの情報を伝える部分です。

（１）生まれたばかりの赤ちゃんが、親の顔を見て嬉しそうにしているようにみえることがあります。この直感的な印象は、実験によっても裏付けられています。実験では、生後間もない新生児にさまざまな図形を見せたところ、顔の形をした図形を他の図形よりも長く見つめることが発見されました。また、新生児は人の表情の変化にも反応します。これらの結果から、赤ちゃんが顔に対する特別な感受性を持っていることがわかります。

驚くべきなのは、新生児は視力が非常に低いにもかかわらず、顔を注視していることです。赤ちゃんの視力は、生後すぐでおおよそ0・02程度であり、生後6ヶ月でも0・2程度とされています。この限られた視覚能力で、さらに顔を見た経験がほとんどない状態にもかかわらず、赤ちゃんが顔を認識し注目することは、非常に興味深い現象です。

生まれたときから備わっている「顔を見る能力」は、発達の過程で徐々に限定されていきます。顔認知の興味深い現象として、生後6ヶ月頃までにみられる（２）特別な能力があります。大人からすると、人の顔の区別はできても、動物の顔はどれも同じように見えてしまい、個体の区別は難しく感じられます。

しかし、6ヶ月の赤ちゃんは、人の顔だけでなく、サルの顔も区別できるのです。この能力は成長とともに限定化し、1歳頃になるとサルの顔の区別はできなくなり、（３）人の顔の区別に特化します。

この現象は、顔を認識する能力が、日常の視覚経験によって影響を受けることを示しています。赤ちゃんは、日常的に見る機会の多い人の顔は容易に識別できますが、接する機会が少ないサルの顔の識別能力は次第に失われていくと考えられます。一方で、生後9ヶ月までにサルの顔を日常的に見る経験を積んだ場合、9ヶ月になってもサルの顔を区別する能力が維持されます。こうした研究結果から、視覚経験が顔認知能力に大きく影響することが（a）示唆されています。

顔の中でも特に「目」、つまり視線は、コミュニケーションをとる上で重要な役割を果たしています。視線は、相手が何に興味を持ち、どこに注意を向けているのかを示す手がかりとなります。赤ちゃんが視線に（b）ピンカンであることは多くの研究で確認されており、新生児でも、目を閉じた顔よりも目を開けた顔を好みます。視線が合わない顔よりも自分に視線を向けた顔を長く見つめるのです。

さらに、顔を見る際の注目の仕方には、文化による違いもみられます。たとえば、東アジアの人々は目に注目する傾向があるのに対し、欧米の人々は顔全体を見ようとします。この文化的な違いは、7ヶ月の赤ちゃんにもすでに現れています。日本人の赤ちゃんは、相手の表情を見る際に目元に注目する傾向が強く、イギリス人の赤ちゃんは口元を見ることが多いという研究結果があります。

このことから、顔の見方に関する文化的学習は、1歳になる前から始まっていると考えられます。顔を見る能力は、発達初期から（A）に応じて適応し、各（A）にあったコミュニケーション様式を身につけていくのでしょうか。

私自身、娘が生後2ヶ月頃に、視線への反応を試してみたことがあります。娘の布団の周りをぐるぐるとハイハイで移動しながら、娘が私の顔を目で追うか観察しました。すると、私が動く娘も目で追い、視線が合うと「あーっ！」と声を出して喜びました。

視線が合うことは親にとって嬉しいものですが、赤ちゃん自身も嬉しいようです。脳の研究でも、赤ちゃんが親と視線が合うことに喜びを感じていることが示されています。

生まれたばかりの赤ちゃんが他者の表情を模倣する能力を持つことは、多くの研究で示されています。生後1時間から3日の新生児を対象とした実験では、赤ちゃんの前で大人がゆつくりと舌を出すと、赤ちゃんも同じように舌を出し、大人が口を開けると赤ちゃんも口を開けるといった様子が観察されました。これは新生児模倣と呼ばれています。自分に舌があり、それをどう動かせば出るのかわからないはずの赤ちゃんが、他者の表情を模倣するのです。

発達心理学者は、自分の子が生まれたときに新生児模倣がみられるかを試してみる傾向があります。私も例にもれず、出産後すぐに試してみました。

しかし、実際にやってみると、生まれたばかりの赤ちゃんはほとんど眠っているもので、なかなかタイミングが合いません。

目を開けた瞬間をねらって、舌を出したり、口を開けたりしてみました。残念ながら我が子たちは模倣することなく、再びやすやすと眠ってしまい、新生児の実験がいかに難しいかを実感しました。

新生児模倣は、生後6〜8週頃には見られなくなり。その後、9ヶ月頃になると、赤ちゃんは再び模倣を始めますが、この時期の模倣は新生児模倣とは質が異なります。9ヶ月頃からの模倣は、周囲の人の動作や声を真似ながら、楽しそうに声を出したり笑顔を見せたりするなど、コミュニケーションの(c)イッカンとして機能しているのです。

私の子どもたちも、生後9ヶ月を過ぎると、よく模倣するようになりました。こちらが笑顔を見せると同じように顔をクシヤットさせて笑い、泣くふりをするとき悲しそうに眉をひそめ、怒るふりをするとき口を膨らませてプンブンと怒った表情を真似していました。その後、模倣遊びができたことを喜んで笑顔になるのです。模倣を通じたコミュニケーションが立派に成立していました。

「猿真似」という言葉がありますが、実はサルは模倣が得意ではありません。サルに模倣をさせるには、条件づけを用いて強制的に教え込む必要があります。特に、意味のない行為の模倣は、簡単なものであっても、ほとんどできません。

京都大学霊長類研究所で訓練されたチンパンジーは、瞬間的な記憶力では人間を上回りますが、模倣は苦手とされています。相手の表情や動作を見て、それを自分の身体で再現することは決して容易なことではないのです。

では、なぜ人間は模倣が得意なのでしょう。それは、模倣が他者とのコミュニケーションや学習において重要な役割を果たしているからです。

人間は社会を作り、他者と協力しながら生きてきました。他者を模倣することで、その意図や行動の意味を理解したり、経験を共有したりすることができ、効果的なコミュニケーションを可能にできました。また、模倣は、技能や知識を効率的に学ぶ手段でもあります。試行錯誤のみに頼っているのでは時間がかかりますが、模倣により安全かつ効率的に知識や技能を習得できます。

このように、人間は周囲の大人から社会的学習を行う能力を(d)キワめて早期に発達させるよう進化してきました。興味深いことに、赤ちゃんは、単に観察した行動をそのまま再現するのではなく、他者の目標や意図を理解した上で模倣することが、(e)タクミな手法を用いた研究によって明らかにされています。

この実験では、1歳6ヶ月の赤ちゃんに、実験者が棒についた立方体を取ろうとして、手が滑って失敗する場面を見せました。その後、同じ道具を渡された赤ちゃんは、手が滑る動作を模倣するのではなく、棒から立方体を取ったのです。つまり、赤ちゃんは他者の行動を表面的にIするのではなく、その意図を推測してIIしているのです。

さらに、赤ちゃんは、意図的な行為と偶発的な行為を区別して模倣することもできます。実験者がある行為をした後に「あれ?」と言って偶発的な出来事であるかのように振る舞う場合と、「よし」と言って行為が意図的に行われたことを示した場合、1歳6ヶ月の赤ちゃんはIII的な行為をより模倣するのです。

この月齢になると、赤ちゃんは他者の行為を無差別に模倣するのではなく、意図を読み取り、合理的な判断を基に模倣することがわかります。

(奥村優子『赤ちゃんは世界をどう学んでいくのか』光文社新書)

問一 傍線部(a)〜(e)のカタカナは漢字に直し、漢字はその読みをひらがなで答えなさい。

(a) 示唆 (b) ビンカン (c) イッカン (d) キワめ (e) タクミ

問二 傍線部(1)「生まれたばかりの赤ちゃんが、親の顔を見て嬉しそうにしている」とあるが、なぜ生まれたばかりの赤ちゃんがそのようなことができるのか。解答欄の「から」につながるように、本文中から二十字以内で抜き出さない。

問三 傍線部(2)「特別な能力」とはどのような能力のことか。文中の表現を用いて答えなさい。

問四 傍線部(3)「人の顔の区別に特化します」とあるが、特化してしまうのはなぜか。文中の表現を用いて答えなさい。

問五 Aには同じ言葉が入る。当てはまる適語を、文中より二字で抜き出さない。

問六 I〜IIIに当てはまる適語を、それぞれ文中より二字で抜き出さない。

正答例& 2027年度出題傾向

2026 年度 学校推薦型選抜（公募推薦）【国語】

正答例	問一	a しさ b 敏感 c 一環 d 極 e 巧	問	配点
	問二	顔に対する特別な感受性をもっている（から）	1	各 1 点× 5
	問三	人の顔だけでなく、サル顔も区別できる能力。	2	2 点
	問四	日常の視覚経験によって影響を受けるから。	3	2 点
	問五	文化	4	3 点
	問六	I 再現 II 模倣 III 意図	5	2 点
			6	各 2 点× 3
				合計 20 点

2027 年度入試から学校推薦型選抜（公募推薦）の出題内容や配点および試験時間に変更となる。これまで教養問題は、60 分で国語と英語の問題を解く形式であったが、今年度からは国語のみで 60 分の試験となるため、以下に記載する出題傾向を参考にすること。

出題傾向

大問□
評論の読解問題が 1 題出題される。設問内容は、語句の意味を答える問題、内容説明の問題、空欄補充問題、抜き出し問題、内容合致の問題等である。なお、漢字の読み書きの問題は大問□では出題せず、大問□で出題する。大問□の配点は、昨年度までは 20 点であったが、今年度より 50 点となる。これに伴い設問数はやや増加するが、難易度は昨年度までと同程度であるため、対策には過去問題を参考にしてほしい。

難易度は高校基礎から標準レベルで、設問は基礎的な学力を問うものが中心であり、難問は出題されない。抜き出し問題など一部記述式の設問もあるが、選択式を中心に出题される。文章は比較的読み取りやすい内容で、3,000 字程度の標準的な文量である。設問は文章内容を正確に理解できているかを問うものである。まずは学校で学習する内容をしっかり理解し、丁寧に文章を読みながら設問に正確に答える力を身につけよう。そのうえで、練習問題やびわこ学院大学の過去問題を解いて準備を進めてほしい。過去問題は必ず時間を計りながら 2 回以上解き、読むスピードや解くスピード、時間配分を確認しておこう。

大問□
漢字や四字熟語、故事成語、慣用句など、語彙に関する知識を問う問題が出題される。漢字は標準的なレベル（漢字検定 3 級から 2 級程度）の問題で、読み書きともに記述式で出題される。四字熟語、故事成語、慣用句、ことわざ等は、基本的な問題から標準的な問題までを範囲とし、選択式で出題される。

配点は、漢字の読み書きが 2 点× 10 問で 20 点、四字熟語、故事成語、慣用句、ことわざ等が 2 点× 15 問で 30 点となる。学校で学習するレベルの基本的な知識を問う問題が中心であり、難問は出題されない。学校の教材や手元の参考書・問題集を活用し、言葉の意味とともに確実に身につけておこう。